

Title	シロ リス太郎
Author(s)	ヴァルマー, マハーデーヴィー; 長崎, 広子
Citation	印度民俗研究 別巻. 2020, 6, p. 29-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78714
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## シロ リス太郎

マハーデーヴィー・ヴァルマー 長崎 広子 訳・注



ある日妹が言った。とても可愛がられて大切に育てられたので、ほかの子牛とは少し違っていた。とても可愛がられて大切に育てられたので、ほかの子牛とは少し違っていた。シロは妹の家で飼われていた牝牛の子で、思春期に達した雌の子牛だった。

役に立つわよ」 「お姉さんはこんなに動物や鳥を飼っているのに、どうして牝牛を飼わないの。

勤勉さと賢いふるまいにおいて、特に私との比較で、称賛の的だった。実際に、妹のシャーマーは私よりもずっと世事に長けており、小さい頃から

はない。響を与えて、すぐさまその提案が結果につながったとしても、驚くべきことで響を与えて、すぐさまその提案が結果につながったとしても、驚くべきことで聞き手に瞬く間に伝染する。有用性に関するその日の彼女のお言葉が私に影じキーマーが自信たっぷりに何か言うと、彼女の考えは、流行り病のように、

そもそも私は食糧問題を解決するために動物や鳥を飼うのは、まったく好きではなかった。山羊、雄鶏、魚などを飼う根本的な目的を考えると、心がな足、がっしりとした腰、つやつやした背中、長くて恰好のよい首、生えかかっな足、がっしりとした腰、つやつやした背中、長くて恰好のよい首、生えかかった。イタリアン・マーブルに刻まれた牝牛が、磨き上げられたかのようだった。た。イタリアン・マーブルに刻まれた牝牛が、磨き上げられたかのようだった。た。イタリアン・マーブルに刻まれた牝牛が、磨き上げられたかのようだった。か当たった部分は特にきらきらするので、まるでその毛に雲母の粉が塗られが当たった部分は特にきらきらするので、まるでその毛に雲母の粉が塗られているかのように思われるのだった。

の詩である」とどうして言ったのか、それはシロの目を見ると得心が行く。 が、シロはとても嬉しそうに見えた。その大きなピカピカ光る黒い目に献火の 灯火で献火が捧げられ、ヨーグルトと 菓子 を食べさせられた。名は白色つま とってかわられることはなかった。マハートマー・ガーンディーは「牝牛は慈悲 残酷な死を与えられることになるのだが、目に浮かぶ安心感が驚きや恐怖に 懐っこい安心しきった眼差しがあった。その動物は人間から苦痛だけでなく 差しが浮かんでいた。牝牛の目には鹿のように怯えて驚いた様子はなく、人 目は、雪の中で青い水をたたえる池のように見えた。ある独特の安心した眼 しさには、うっとりさせられた。広い光った額、長くて形の良い顔の上でその 夜に黒く見える波のうえに、誰かがいくつも灯火を流したかのようだった。 油皿の炎が映りこんでキラキラしだした時、油皿が旋回した。それはまるで りシロと付けられた。この礼拝儀礼がどんな影響を与えたのかは分からない 赤色 の大きな 額の 印 を付けられ、バターオイルを入れた灯心の燃える四面 ものが沸き起こった。シロは、赤や白の薔薇の花環をかけられ、サフラン色と シロは本当にとても綺麗な子だった。特に黒い水晶玉の目が潤んだその美 牝牛が我が家にやって来ると、知人や付き人たちの間に崇敬の念のような

数日でシロは皆ととても仲良くなり、ほかの動物や鳥は自分たちの体格に

が茎の上でそっと揺れるさまは、まさに眼福だ

魅力があるが、それが緩やかな動きのもつ優美さを獲得することはない。矢

シロの緩慢なのろのろとした動きと比するものは少ない。素早い動きには

の素早い動きは一瞬の間、目を驚かせるが、ゆったりとしたそよ風によって花

をつむり、まるで彼らと触れ合う喜びに浸っているかのようだった。遊び、鳥は背中や額に乗って耳や目をくすぐりだした。シロもじっと立って目違いがあることを忘れるほどであった。犬や猫たちはシロの腹の下や足の間で

もらえるものと待ったのち、ムォームォーと大騒ぎするのだった。呼びはじめる。お茶や朝食、食事の時刻もよく分かっており、しばらく何か呼がはじめる。お茶や朝食、食事の時刻もよく分かっており、しばらく何かい感覚がとても鋭くて、車が門に入ったとたんモーモーと鳴き声で私たちを

不安などの様々な感情の起伏がその大きな黒い目に映しだされるのであった。応じてシロにはたったひとつの鳴き声しかなかったが、嬉しさ、悲しみ、憂い、正にのせて目をつむった。離れようとすると、首を回して見つづける。必要にてもらうために首を伸ばす。手でさすると、安心しきった表情で顔を肩のでてもらうために首を伸ばす。手でさすると、安心しきった表情で顔を肩のかけは私たちに親近感や人間の愛情のような親しさを求めた。近づくと撫

猫は不思議な光景を見せるようになった。乳しぼりの時に皆がシロの前に一ですべてのものが「浴びるほどの牛乳」のご利益に与るようになったのだ。犬やので、アカのために何キロか残しておいても、近所の子供から犬や猫に至るま今では我が家で牛乳の大祭がはじまった。シロが朝晩十二キロも乳を出す

来ない日には、モーモーと鳴いて呼んでいるようだった。をのが去るまで、シロは満足した眼差しで皆を見つづけた。彼らがなかなか自分の鳴き声で礼を言うように、を切の周りを飛び跳ねるのだった。すべての自分の鳴き声で礼を言うように、極めてかしこまった様子で待ちつづけた。そ別になって座り込み、料理人「は犬猫の前にきちんと食事の皿を置くと、特別になって座り込み、料理人」は犬猫の前にきちんと食事の皿を置くと、特別になって座り込み、料理人」は犬猫の前にきちんと食事の皿を置くと、特別になって座り込み、料理人」は犬猫の前にきちんと食事の皿を置くと、特別になって座り込み、料理人」は犬猫の前にきちんと食事の皿を置くと、特別になって座り込み、料理人

り問題は解決した。
り問題は解決した。
やの牛飼いがこの仕事に自分を雇うように熱心に頼んできた時、乳しぼ知らないし、村から来た者は練習していないので、何時間もかかるほどこの仕知らないし、村から来た者は練習していないので、何時間もかかるほどこの仕知らないし、村から来た者は練習していないので、何時間もかかるほどこの仕知らないし、村から来た者は練習していないので、何時間もかかるほどこの仕知らないし、村から来た者は練習していないので、何時間は解決した。

というものだった。
というものだった。
い臓に達した。針が心臓を突き抜けると、血が巡らなくなり確実に死に至る、心臓に達した。
い配になって、獣医を呼んで診てもらった。何日間かいろいろに下された診断は、牝牛は針を食べさせられ、その針が血液とともに流れてに下された診断は、牝牛は針を食べさせられ、その針が血液とともに流れてに下された診断は、牝牛は針を食べさせられ、その針が血液とともに流れてい臓に達した。針が心臓を突き抜けると、血が巡らなくなり確実に死亡を入れている。

に食べた針は口に刺さってとどまる。粗糖の大きな塊の中に埋め込まれた針混入した可能性はある。しかし医者の答えで分かったことには、餌といっしょいったいどういうことなのか?餌は自分たちで管理していたが、その中に針が苦痛と驚きのふたつの感情が心に沸き起こった。針を食べさせられるとは

だった。 は喉の下に落ち、最終的に血液とともに循環し心臓に到達する、ということ

私には想像すらできなかった残酷な事実が最後に明らかになった。たいて知られるや否や、牛飼いはある種の雲隠れ状態となり、そのため疑いことが知られるや否や、牛飼いはある種の雲隠れ状態となり、そのため疑いことが知られるや否や、牛飼いはある種の雲隠れ状態となり、そのため疑いな確信に変わるのは当然のことだった。そもそも牛飼いが逃げなくても、法が確信に変わるのは当然のことだった。そもそも牛飼いが逃げなくても、法が確信に変わるのは当然のことだった。そもそも牛飼いが逃げなくても、法が確信に変わるのは当然のことだった。そもそも牛飼いが逃げなくても、法が確信に変わるのは当然のことだった。そいて記がは、多くの牛乳を購入していた顧客の家で牝牛が飼われることを嫌い体情にある。

戻が浮かぶだけだった。 その時からシロの死への闘いがはじまった。それを思い出すだけでも、未だ に耐えていた。ただ時折シロの美しいけれども悲しげな両目の端に、ふた粒の に耐えていた。ただ時折シロの美しいけれども悲しげな両目の端に、ふた粒の

ザラした舌で首を舐めはじめた。嬉しそうな表情を浮かべた。そばに行って座ると、私の肩に顔を置いて、ザラ嬉しそうな表情を浮かべた。そばに行って座ると、私の肩に顔を置いて、明にもうシロは起き上がることすらできなかったが、私が近寄るとすぐに、目に

の牝牛の乳が飲まされたが、好まなかった。母の乳を飲み、母と遊びたかったアカは可哀そうに、母の病と迫りくる死に気づいていなかった。アカには別

いっしょに遊ぼうと周囲を跳ね回りつづけた。ので、機会をうかがってシロのそばに来たり、頭で突いて起こそうとしたり、

間もなく死んで動かなくなってしまうかと思うと涙があふれた。
く、ふんだんに乳を出した牝牛が、こんなに綺麗でいたずらな子牛を残してく、ふんだんに乳を出した牝牛が、こんなに綺麗でいたずらな子牛を残しているいれば、突然別れなければならないものもいた。しかしこんなに胸を引のもいれば多くの生き物を飼ってきたので、それらのなかには天寿を全うするも

病人のそばに座りつづけた者だけが知っている。一日に数回往診に来たが、希望の光が見えるような治療法を誰も言わなかっ一日に数回往診に来たが、希望の光が見えるような治療法を誰も言わなかっラクナウやカーンプルなどの町からも動物の専門医を呼び、地元の獣医も

きてはシロを見に行った。 死ぬ時にそばにいたいということだけだった。昼間に限らず夜にも何度も起 死ぬ時にそばにいたいということだけだった。昼間に限らず夜にも何度も起 ようになると、最期の時が来たことを察した。もう願うことといえば、シロが シロの美しいピカピカ光る目が輝きを失い、リンゴの搾り汁も喉につかえる

しまったのだろう。 ら滑り落ち地面に倒れた。おそらく針は心臓を突き抜けてその動きを止めて の顔をいつものように私の肩に置いたとたん、石のように重くなって私の腕か ののがある日の明け方の四時のことだった。様子を見に行くと、シロは自分

ねつづけた。 悲しみが海のように押し寄せてきたが、アカはこれも遊びだと思って飛び跳悲しみが海のように押し寄せてきたが、アカはこれも遊びだと思って飛び跳り分が飼った動物の亡骸はガンジス河に流すことにしていた。シロを運ぶ時、

もしも深い溜息を言葉に訳すことができるなら、それはこだまして響き渡

1 原文は mahādeva で、家庭で雇われたバラモンの料理人を指すことを

2 ヒンドゥー教で牝牛は神聖な生き物とされ崇敬の対象である。牛肉は食 AT「ああ、我が牛飼いの国よ」と皮肉をこめて嘆いている。 牛飼いが牝牛を苦しめ死に至らしめたことに激しく落胆し आह मेरा गोपालक 用にされないため、インドは牝牛の保護国ともいわれる。しかし著者は、 Ved Prakash Singh 氏よりご教示いただいた。この場を借りてお礼申し上



## リス太郎

な命を探している。
さな生きものを思い出す。あの時の私は蕾を探していたが、今日はあの小ささな生きものを思い出す。あの時の私は蕾を探していたが、今日はあの小さ茂った緑に隠れて座り、私が近づくとサッと肩に飛び乗って驚かせた、あの小今日イエロージャスミンが蕾をつけた。これを見ると思わず、この蔓の生い

たかもしれないと誰が知るだろうか。ことだろう。金色の蕾に姿を変えて、私をびっくりさせるために、地上に現れことだろう。金色の蕾に姿を変えて、私をびっくりさせるために、地上に現れしかしあの子はもうすでにこのイエロージャスミンの根元で土に帰っている

意味で使っている。

意味で使っている。

意味で使っている。

意味で使っている。

意味で使っている。

意味で使っている。

意味で使っている。

の学のところに対ればならない。そればかりか、遠方の親しい人たちにも、先祖の到来という甘美な知らせを、その耳障りな鳴き声で知らせなければならないのだ。それなのに私たちは、カラスとそのカーカーという鳴き声を侮蔑のないのだ。それなのに私たちは、カラスとそのカーカーという鳴き声を侮蔑の意味で使っている。

つけたのだった。
さな子供で、おそらく巣から落ちたのだろう。今やカラスは恰好の餌食を見さな子供で、おそらく巣から落ちたのだろう。今やカラスは恰好の餌食を見に隠れた小さな生き物に視線が止まったからだった。近づいてみるとリスの小りラスの縁起譚の私の考察が突然中断した。というのも、植木鉢と壁の間

極めて重いものだったので、リスはじっと植木鉢にひっついて倒れていた。二羽のカラスのくちばしによって付けられたふたつの傷は、その小動物には

が、口は開かず、牛乳のしずくが両わきに零れ落ちた。で細いこよりを作って牛乳に浸し、やっとのことでその小さな口に付けてみた自分の部屋に連れてきて、綿で血を拭き取り、ペニシリンの軟膏を塗った。綿りの部屋に連れてきて、綿で血を拭き取り、ペニシリンの軟膏を塗った。綿りラスのくちばしで傷つけられると助からない、だからこのまま放っておく

なを驚かせるようになった。そのつやつやした毛、房の付いたしっぽ、くりくり動くピカピカの目で、みんこち見るようになるほど、とても元気になり、落ち着いた。三、四カ月後には、日目になると私の指をその小さな前脚で掴んで青いビー玉みたいな目であち日目にすると私の指をその小さな前脚で掴んで青いビー玉みたいな目であち

は何時間も机の上で壁を支えに立って、ピカピカ光る目で私の仕事を見つめは何時間も机の上で壁を支えに立って、ピカピカ光る目で私の仕事を見つめは何時間も机の上で壁を支えに立って、ピカピカ光る目で私の仕事を見つめな何時間も机の上で壁を支えに立って、ピカピカ光る目で私の社事さで降りた。この旋回運動は、リス太郎を捕まえようと強く思い、リス太郎は良い方法をあみ出した。私の足元に来て、さっとカーテンまでのぼり、同じ素早さで降りあみ出した。私の足元に来て、さっとカーテンまでのぼり、同じ素早さで降りあみ出した。私の足元に来て、さっとカーテンまでのぼり、同じ素早さで降りあみ出した。私の足元に来て、さっとカーテンまでのぼり、同じ素早さで降りおい。この旋回運動は、リス太郎を捕まえようと私が立ち上がるまで続いた。ある時は、リス太郎を捕まえて良い封筒に入れると、その奇妙な態勢で、時にての小さな身体が封筒の中にすっぽりとおさまった。その奇妙な態勢で、時にな何時間も机の上で壁を支えに立って、ピカピカ光る目で私の仕事を見つめな何時間も机の上で壁を支えに立って、ピカピカ光る目で私の仕事を見つめな何時間も机の上で壁を支えに立って、ピカピカ光る目で私の仕事を見つめな何時間も机の上で壁を支えに立って、ピカピカ光る目で私の仕事を見つめなります。

私たちは動物名を呼称とし、こうしてリス太郎と呼びはじめた

ていたこともあった。

ケットをもらい、同じ姿勢で封筒の外に出た前脚で掴んでかじりつづけた。おなかが減るとチッチッと音を鳴らして私に知らせ、カシューナッツやビス

そしてリス太郎の人生で初めての春が訪れた。センダンやジャスミンの香りが私の部屋にそっと広がりはじめた。戸外のリスたちが窓の網戸のそばにやっだきて、一体全体チッチッと何のおしゃべりをしだしたのだろうか。リス太郎が網戸のそばに座って懐かしそうに外を覗いているのを見て、私はこの子を自由にしてやらなければならないと思った。留め金を外して網戸の片側を開けた。そしてそこを通ってリス太郎は外に出ると、本当に自由の息を吸った。こんなに小さな動物を家飼いの犬や猫から守るのも、難しい問題ではあった。たが大学から戻って部屋を開けて足を踏み入れたとたん、リス太郎は網戸の通路から中に入ってきて、私の足から頭まで、また頭から足まで駆け巡りはじめたのだった。その時からこれが日課となった。私が部屋からに出ると、リス太郎は網戸の通路から中に入ってきて、自分のブランコで揺れるのだった。

ジャスミンの葉の中に隠れた。か。ある時は花壇の花の中に、ある時はカーテンのひだの間に、またある時はか。ある時は花壇の花の中に、ある時はカーテンのひだの間に、またある時は一体いつから、またどうして、私を驚かせようと思うようになったのだろう

いた記憶はない。リス太郎はその中で例外だった。私が食堂に着くとすぐに、れらの中に私といっしょに私の皿から食事をしようなどと度胸のあるものがうちではたくさんの動物や鳥を飼っていて私によくなついていた。しかしそ

他の餌を食べなかったり、ブランコから下に放り出したりするのだった。ューナッツがリス太郎の好物だった。何日間かカシューナッツをもらえないと、正に座って、私の皿からひと粒ずつご飯を取って、きれいに食べつづけた。カシューナッツがリス太郎は苦労の末、リス太郎に皿のそばに座ることをしつけた。そ窓から出て中庭の壁とベランダを通ってテーブルの上に駆け寄り、私の皿に

と、踵を返して自分のねぐらに戻っていった。私の部屋が開くとリス太郎はブランコから降りて駆け寄り、他の人だと見る私の部屋が開くとリス太郎はブランコから降りて駆け寄り、他の人だと見るその頃、私は交通事故で怪我をして数日間入院することになった。その間、

リス太郎は自分の好物をほんの少ししか食べなかったことになる。除をすると、中はカシューナッツだらけだった。ということは、私の入院中に皆はリス太郎にカシューナッツを与えていたが、私が退院してブランコの掃

なったかのように感じた。もゆっくりとなでつづけたので、リス太郎がそこを離れると、看護師がいなくもゆっくりとなでつづけたので、リス太郎がそこを離れると、看護師がいなく私の体調がすぐれない時には枕元に座って小さな前脚で私の頭と髪をとて

でがら涼むこともできた。 
その昼間に仕事をしていると、リス太郎は外に出ずブランコにも乗らなかった。 
ののをはにいながらにして暑さを避ける全く新しい方法をあみ出したのを、 
ののをはにいながらにして暑さを避ける全く新しい方法をあみ出したの

いてきた。前脚があまりにも冷たかったので、私は起き上がってヒーターをつ冷たい前脚で、子供の頃に瀕死の状態で掴んだ私のあの指を掴み、手にひっつしい時でさえも、リス太郎はブランコから降りて私のベッドにやってくると、 リスが二年以上生きることはない。リス太郎の人生の旅も終わりをむかえ

の生で目覚めるために、リス太郎は眠りについた。け、リス太郎を温めようとした。しかし朝の最初の光がさすと同時に、また別

足させてくれるからでもあった。
足させてくれるからでもあった。
とさせてくれるからでもあった。
とさせてくれるからでもあった。
とさせてくれるからでもあった。
とさせてくれるからでもあった。
とさせてくれるからでもあった。

(原題 可でえ)





## 使用テキスト

Mahādevī Varmā, *Merā parivār*, Allahabad: Lokbhārtī Prakāśan. 1986

## 解説

の糸」より」、印度民俗研究第九号(一九九五)がある。 の糸」より」、印度民俗研究第九号(一九九五)がある。 でラーハーバードで女 マハーデーヴィー・ヴァルマー作「思い出の一シーン」及び「記憶 園久子訳・注 「マハーデーヴィー・ヴァルマー作「思い出の一シーン」及び「記憶 園久子訳・注 「マハーデーヴィー・ヴァルマー作「思い出の一シーン」及び「記憶 園久子訳・注 「マハーデーヴィー・ヴァルマー作」とどまらず、画家や随筆家としても感性豊かな作品を残している。日本でもとどまらず、画家や随筆家としても感性豊かな作品を残している。日本でもとどまらず、画家や随筆家としても感性豊かな作品を残している。

本編は彼女の随筆集『私の家族』(Merā parivār)からふたつの小品を翻でたちに向けられた優しい愛情表現は、普遍的なものであり、時代を先取りしたちに向けられた優しい愛情表現は、普遍的なものであり、時代を先取りしたちに向けられた優しい愛情表現は、普遍的なものであり、時代を先取りしたちに向けられた優しい愛情表現は、普遍的なものであり、時代を先取りしたちに向けられた優しい愛情表現は、普遍的なものであり、時代を先取りしたちに向けられた優しい愛情表現は、普遍的なものであり、時代を先取りしたちに向けられた優しい愛情表現は、普遍的なものであり、時代を先取りして動物を飼うことが一般的でなった今日の方が作品でいたともいえる。「ペットロス」という言葉が一般的になった今日の方が作品でいたともいえる。「ペットロス」という言葉が一般的になった今日の方が作品では、本編は彼女の随筆集『私の家族』(Merā parivār)からふたつの小品を翻たちに対感する読者は多いことだろう。

られなければ、動物を飼うこと自体を躊躇することもあろうが、マハーデーとの別れは彼女にとって身内を失う辛さと同じである。別れる悲しみに耐えこの随筆集のタイトルが示すように、ペットを「私の家族」とよび、動物たち

と解釈されよう。 と解釈されよう。 と解釈されよう。 と解釈されよう。 と解釈されよう。 と解釈されよう。 と解釈されよう。 と解釈されよう。 と解釈されよう。

ヴィー・ヴァルマーが数多くの動物を飼っていたことを見ると、彼女にそれは

痛みはない世界

悲しみはない

燃えつきることはない

朽ちる ものの哀れを 知ることはない

朽ち果てる権利は、わたしのものですどうかやめてください、神さま!あなたの慈悲のお陰で

(अधिकार より

37